

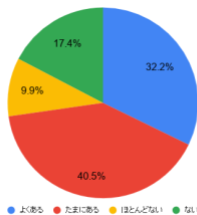
豊明希望チャペル礼拝

2025/8/31

「再び『原罪』について」

ローマ人への手紙 1：20～32

癒やし
癒しとは？



『癒やし』という言葉があります。

クリスチャンは、これは、病気の癒やしの意味での「癒やし」(healing)、病気が治ることと理解します。

しかし、今の世の中で一般的に、このいやし(癒やし)が使われるとき、別の意味になるのではないのでしょうか。ウィキペディアで調べると、このことばが出てきたのは、わりと新しい 1990 年代からだ、と、こう説明されています。(←「癒やしが必要だと思うとき」というアンケートで、32%、三人に一人が「よくある」と答え、40.5%がたまにあると答えている)みなさんはどうなののでしょうか。

『癒やし』「・・・バブル崩壊後の日本では、1990 年代中頃から「癒やしブーム」が流行し、その後も影響を与えた「癒やしブーム」の背景には、特に病人でもない多数の人々が「癒やされたい」という欲求を持つようになったこと、「癒やし」をマーケティング用語としてメディアや企業が展開した、所有欲や充足感を満たさせる市場戦略が成功したことがあると考えられる。」(ウィキペディア)

「いやし」は金になる。そう気づいたというわけ。それほど、世の人々は、特に今の時代、癒やしを必要としているということでしょう。

今回、癒やしについて触れたいと思って、とりあえずネットで見ていたら、ある仏教のあるホームページには、こんな説明がありました。(『円覚寺』ホームページ)「癒は「やまいだれに音を表わす愈(ゆ)をつけて「心のしこりが取れる」ことで「・・・からだの中の病気が、くり抜いたように抜けてくれること」という意味が書かれています。」

こころのしこりがとれること。そして、さすが、宗教のホームページです。こう付け加えます。「癒やしは一時ブームのようになりました。アロマテラピー、α波音

楽などが癒やしとして取り上げられました。この場合、癒やしという言葉は、単なるストレス解消を表わしているように思います。

ある〇〇先生は、「**お手軽な癒やしのせいで気付かぬうちに見えないストレスや疲れなどを蓄積する恐れがある**」とも危惧されていました。」

お手軽な癒やしは、対処療法的なもので、心の本質の問題を、見過ごし、かえってストレスを蓄積して、かえって深刻な心と身体の招く恐れがあるということだと思います。

私には、この問題を巡って、話しを広げる力はありません。ネットで調べれば、あらゆる視点で、この問題はとりあげられます。音楽がいい、いやしには、やはり時間が一番の特効薬だ、私たちの団体では、こういう方法で、癒やしを解消し、あるいは軽くしてあげることが出来ると・・・そういう宣伝で溢れています。そんなことをしらべていて、今回、あえて、仏教のホームページを参考にさせていただきましたが、それは、「いやし」によって、かえって見過ごされてしまうことがあるという視点は、大変に興味深く、また、考えの違いはありますが、やはり、日頃から人の魂の問題を扱っている人たちは、癒やしの必要な人間の本質のようなものに迫っている点で共感できたからです。

聖書から、私は、ローマ人への手紙 1 章にある原罪の問題に、たびたび触れてまいりました。今日も、その点に三度四度となるかもしれませんが、繰り返し言及したいと思うのです。

「1:21 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」

パウロが注目しているのは、人間の心にある「むなしさ」と「くらさ」の二つのキーワードです。

「**むなしさ**」とは、「むなしさ“は「虚しさ」「空しさ」と書かれていますが、もともとは「**実無し**」という言葉が由来だそうです。「実無し」とは「**中身がない、からっぽ**」、また「**充実感がない、自分の行動に価値を見出だせない**」という意味があります。」(諸富祥彦『むなしさの心理学』の「1からわかる仏教」のホームページの引用として)

スポーツをやってみても、その競争社会に疲れを覚え、いつしか、スポーツそのものに空しさを覚えた・・・出世競争に人生をかけてきて、学歴と、生活も豊かになったが、ちっとも、幸せじゃない。などなど。充実感がない、生きる事に価値が見いだせない。そんな心境です。

「暗さ」は、辞書でひくと、「不安や悲しみなどで気分が晴れない状態」となり、念のために、先頃の AI に調べてもらおうと。「暗い気持ちの原因は自信のなさ、過去のトラウマ、予期不安、またはうつ病などの病気が考えられます。」と、暗さの

“空しさの本当の原因”とは？

原因にまで触れてくれました。

多くの説明は不要と思います。パウロは、この「むなしさ」と「暗さ」の問題は、人間の罪から来ていると言います。それは、個別の罪と言うより、人間が生まれながらに持っている『原罪』にあると言います。原罪とは、聖書では、アダムとイブが犯した罪です。それ以来、人間は、この原罪をもったまま産まれてくるのです。そして、この原罪が、次の罪を生むのです。それが、このローマ人への手紙 1 章の 22 節以下で説明されているとおりです。

まず、偶像崇拜、自分でつくった神に、この原罪から来る空しさと暗さを埋めてもらおうとする。当然出来ない。それで、人間同志がむさぼり合うように、その肉体と心を求める。26, 27 節にある、「情欲」で象徴される言葉です。人間にどんなに愛があっても、原罪から来る欲望を、心の底まで見たし解決する力はありません。もう気づかねばなりません。神から離れたことが、空しさと暗さを呼んだのです。ですから、早いうちに、神に立ち返り、神との結びつき、すなわち、神への感謝、礼拝を取り戻すことに気づかないといけないのです。

しかし、人は、

「1:25 彼らは神の真理を偽りと取り替え、造り主の代わりに、造られた物を拝み、これに仕えました。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。」

つくり主に戻らねば解決されないのです。その解決に気づかないままの人間は、このあとは、人間は不幸へと転がり落ちていきます。すなわち。

「1:28 また、彼らは神を知ることによって価値を認めなかったもので、神は彼らに無価値な思いに引き渡されました。それで彼らは、してはならないことを行っているのです。」

神の価値を軽く見て、この世のものや人に価値を置いたのですから、神から見れば無価値と思える、この世の価値観、けっして、空しさと暗さを解決出来ない、被造物に行くままに人間をしたというのです。

その結果。

「1:29 彼らは、あらゆる不義、悪、貪欲、悪意に満ち、ねたみ、殺意、争い、欺き、悪巧みにまみれています。また彼らは陰口を言い、1:30 人を中傷し、神を憎み・・・」うんぬんと。

そして、この一見、誰でも犯している、軽微な罪と見える、ねたみとか、欺き(うそ)・・・陰口、人を傷つける中傷は、大病、癒せぬ病の、表に出てきた症状にすぎない。いっけん、風邪のように軽微に見えるが、実は死に至る大病を抱えているということです。ですから、病気で言えば死が、診断結果であり、法的に言えば死刑が、その判決だということです。

「1:32 彼らは、そのような行いをする者たちが死に値するという神の定めを知りながら(「いうまでもなく」「まちがいなく」という意味)、自らそれを行っているだけでなく、それを行う者たちに同意もしているのです。」

先に、仏教のホームページからの、「いやし」についての説明を見ましたが、さすが魂のことを専門に考えている人たちですから、「いやし」の先にある、原因となる問題に触れない限り、対処療法でしかないことを、たくさんの人たちの悩みを見、あるいは、対応してきて、これは、実感として感じているのだと思います。

ですから、お手軽な対処方法では、かえって、大病を見逃すことになる、素人療法は危険だと言っているのだと思います。私もそう思います。ただ、私の、この事に対する解決方法は、異なります。

人間が創造されたところに戻り、また、今も生きて働いておられる神のことを考えます。そのことを考えれば、解決方法は、上(神)にしかないこと。そして、その解決方法を、イエス・キリストの十字架という形で、人類に示されたことを、明確に、明瞭に知っているからです。

パウロは、この一連の人間の現状を、描き、そして嘆きながら、このローマ人への手紙の 7 章に至り、神の答えを示します。それは、すなわち、原罪から来る人間の心の問題、ひいては、人間の心の「いやし」への答えとなると思うのですが、こういう答えです。

「7:24 私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。7:25 私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します。・ ・」

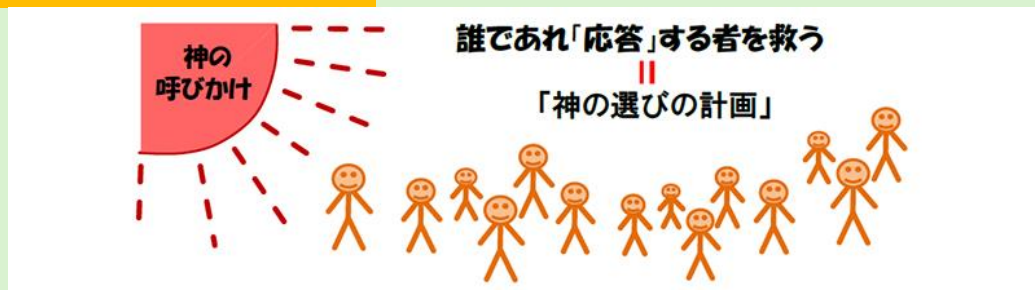


原罪の問題は、神がそのひとり子を、累積した原罪の実を、まさに根っこから、原罪の実を含めて、根こそぎ抜いてしまい、滅ぼすために送られたのです。

法的に言えば、無罪とするため。身体的な**病気**にたとえれば、病気の元を根絶するようなものです。



さて、現代的な「いやし」の問題を入口に、その根源的な解決の方法について聖書から考えてきました。その癒やしとは、癒やしの必要な状況、空しさと暗さの原罪の問題を根本的に解決するには、神の愛、神が送ってくださったひとり子の贖いによって原罪の問題が根源的に解



決されるしかない、そして、解決されるのだと言うことをみてきました。

パウロは言います。では、イエス・キリストにどのようにして解決していただくのか。それは、「信仰義認」の言葉に解決が表されています。

信仰義認とは何か、AI に聞いておきましょうか。

「信仰義認（しんこうぎにん）とは、キリスト教における中心的な教義の一つで、「人は善行によってではなく、信仰によってのみ神に義と認められる（救われる）」という考え方です。」

聖書のパウロの言葉を見ます。この図は、この御言葉の解説としての図となります。

「3:22 すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。」

「誰であれ『応答(信じる)』する者を救う」＝「神の選び(めぐみ=愛)の計画」
今日教えられたことは、聖書の中心の考えであり、柱となる考え方です。

そして、何よりも、言いたいのは、このことをおっしゃれるのは、神さまであり、その神さまは、今も生きておられるということです。

極端な話し、今も、ここで、この上で、見ておられるということです。応答する人を見ておられる。何なら天使が、そこらに数人いて、心が動いて、信じます、はい、応答しますという人を、チェックして、巻物に書いて、天国に報告しようとしているということです。天の門にあなたが立ったとき、その巻物であなたはチェックされ、あ、2025年8月31日、日本の愛知県にある豊明希望チャペルの礼拝で、前の席から二番目の横3列目の〇〇さんが、救いを信じました。天国の門から入れる人です。と、それほどリアルに、今も生きておられ見ておられるということです。

今日、まだイエス様の事を信じられない方がおられるなら、今日こそ、信じる決意をかためて欲しいと思います。すでにクリスチャンとされている人も、この恵みによって与えられた救いを感謝し、この救いこそ一番の宝として、感謝と賛美の歩みをここから、この週も歩み始めましょう。